

森村誠一

長編本格推理
垂直の死海



KODANSHA

講談社
ノベルス

NOVELS

垂直の死海

昭和五八年五月一〇日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六四〇円

著者—森村誠一 ©1983 SEICHI MORIMURA Printed in Japan

発行者—三木章



発行者—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二 郵便番号一一二二 電話東京(〇三)—九四五—一一二二 (大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—凸版印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

正直の死海

符誠一

ODANSHA 講談社
ヘルス NOVELS

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 野中昇
本文イラストレーション 野中昇

「垂直の死海」

—— 目次

行旅の邂逅 | 9

自走する欠陥 | 20

ダブル老死 | 38

放棄された過誤 | 66

予告する砂丘 | 78

海中工場 | 101

置きさられた動機 | 123

権力との共犯	222
怨嗟の彫琢	212
隣り合わせの恐喝	198
受信した殺意	188
古い屈託	177
整理された青春	164
共犯の鎖	140

行旅の邂逅かいこう

1

千野ちの順一は旅が好きだった。学生時代は金はなかったが、ふんだんに恵まれた時間を使って全国を歩いた。アルバイトをしてなにがしかの金を得ると、ユースホテルや寺などに泊って旅をした。天気がよいと野宿することも稀まれではなかった。

就職をして仕事に拘束こうそくされるようになる、学生時代のように気ままな旅はできなくなつたが、未知の邦くにへの憧憬しょうけいが欲求不満によつて促うながされ、旅への想いはますます強いものとなつた。

社会人になつてからの旅行は、いずれも確たる目的のある旅行である。それは「旅行」とは呼べても、「旅」ではなかった。

旅とは、日常の鎖を断ち切り、非日常の世界への脱出に始まるものである。学生時代、千野はヘルマン・ヘッセの詩を愛誦あいじゆした。

おゝ見よ、白い雲はまた

忘れられた美しい歌の

かすかなメロディーのように

青い空をかなたへ漂つて行く。

長い旅路にあつて

さすらいの悲しみと喜びを

味わいつくしたものでなければ

あの雲の心はわからない。

ヘッセの「白い雲」という詩は、特に愛誦した。また「旅の秘術」という詩の中の、

——ただ目的だけをせわしく求めず目には、
さすらいの甘さはついには味われない——

という一節ほど千野の心を如実に言い現わしたものはない。

ヘッセの初期の詩は甘く平明である。彼の初期の作風が青春時代を回想しながら、本来の自分の本質を見つめようとしているだけに、その甘さの中に、すべての人間に共通する青春への郷愁がある。

青春を人生のどの方角にも行ける無限の可能性に充ちている時期と仮に定義すれば、千野にとってそれはまぎれもなく学生時代であった。千野はまだ若い。だが就職したことによって人生の一つの方向へ行く列車に乗ったことは確かである。可能性が無限から有限になったのだ。

学生時代は、あり余る可能性にそれがかえって重苦し

く負担になった。その重苦しきから逃れたいばかりに、青春を憎んだことすらある。そんな時期の青春の不安や息苦しさを端的に表現したヘッセの詩は、千野の心の中枢を射貫いた。

社会人の視点から見直してみると、ヘッセの詩は甘い。だがその甘さの中にこそ青春の本質があるのでないのか。

千野は仕事がうまくいかないときや、心が落ち込んでいるときなどにヘッセの詩を口吟むと、柔らかに救われるようにおもう。救いは決して根本的ではないが、それがあるのとないのでは大分ちがう。

ヘッセの旅の心は「漂泊」であった。そして千野はヘッセを気取って漂泊の旅をした。なにがしかの旅費を稼ぐと、行先も定めず出発する。予定はほとんどたてず、行きあたりばったりである。旅費はもちろん十分ではない。日曜祭日には宿にアブレることもある。またアブレなくとも旅費の都合から野宿を強いられる。「行楽」

とはほど遠い緊張と不安に満ちた旅であったが、そういう旅ができなくなつてから振り返つてみると、なんとも懐しい。

あれこそ本当の旅であり、自分の青春だつたと言えるのである。

学生時代の旅の記憶の中で、果たして本当にあつたことなのか、あるいは夢を見たのか、定かではないことがある。場所もいまとなつては正確におもいだせない。

それは東海地方の小さな町であつた。千野はなぜそんな町に寄つたのかよく憶えていない。別に景色が際立つて優れている所でもなければ、由緒ある史蹟もない。友人もいながつた。おそらく行く雲のようにふらりと立ち寄つたのであろう。

彼はその見知らぬ街角で猛烈な腹痛に襲われた。旅費が乏しいので、口に入るものはなんでも食べている。前日食べ残した駅弁を今朝食べたのがいけなかつたようである。目が眩み、立っていられなくなつた。地上にうず

くまつて腹を押えても、錐でもみ込むように激痛が走る。全身から脂汗が流れた。そのとき、「どうなさつたの」という柔らかい女の声、頭上から問いかけてきた。問いかけられても答えられない。あまりの苦痛のため、目も見えないほどであつた。

「あらあら、ひどい顔色だわ。とにかく家の中に入って少し休みなさい」

女の人は言つて千野に手を貸して助け起こした。その女性の家の前で苦しんでいたとみえて、彼女は千野を自宅へ運び込むと、布団を敷いて甲斐甲斐しく看病してくれた。千野は家に運び入れられてから意識を失つたらしい。それ以後の記憶が途絶えている。

気がついたときは、それから二日経つていた。

「もう大丈夫よ。なにか悪い物を食べたんでしょう」
優しい面立の女性の顔が覗きかけて、微笑んだ。どうやら医者まで呼んでくれた様子である。千野はさらにその家に二日厄介になつてようやく動くようになった。

中毒症状が比較的軽く、若かったので、回復が早かったのである。もう少し寝んでいけとしきりに勧める女性の言葉を振り切って千野はその家を辞去した。

その家は、旦那らしい男が朝家を出て夜遅く帰って来た。子供の声離れた部屋の方でしていた。旦那も気の善い人で出勤前に何度か千野を覗いてゆつくり養生していけと言ってくれた。見ず知らずの人間に対する親身も及ばぬ親切であった。費用もかなりかかったはずであるが、一切仄めかさなかつた。

それだけに千野は心苦しく居たたまれないおもいになり、しきりにとめる女性の手を振り切るようにしてまだふらつく足を踏みしめながら辞去したのである。

それほど親切を施されながら、恩人の女性の名を聞くことも、その家の表札を確かめることもしなかつたのである。だから、やはりまだ完全に回復していなかつたのである。

事実、帰京してから、また一週間ほどぐったりしてな

にをする気力も起きなかつた。とりあえず札状一本も出さなくてはとおもいながら、住所がわからない。できるだけ早い機会に現地へ戻って改めて礼を述べようとおもっている間に生活と学業を維持するためのアルバイトに追われた。

彼がようやく恩人の家を再訪できたのは、それからほぼ一年後であった。行ってみるとこの一年の間に町の様子がいぶ変っており、恩人の家の所在もよくつかめない。凄まじい腹痛で意識も朦朧としかけていたので、土地の見当がまったく記憶にないのである。

それでも八方歩き回ってようやくそれらしき場所を探し当てた。だがそこは一面の焼け跡になっていた。周辺の住人に質ねると、千野が来てから一ヵ月ほど後、その地域の一軒から失火して数十戸が類焼したということであった。何軒か焼け跡に家をまた建てたが、まだ帰って来ない家も多いという。そのままその土地へ移って行った人もいるそうである。尋ねる人間の名前がわから

ないうえに、ひどく排他的な土地柄で、千野の質問にも面倒臭がつてよく答えてくれない。そういう土地柄での親切こそ本物であった。

そのときになって千野は恩人の女性の特徴や年齢すらも憶えていないことに気がついた。

「優しい顔をした優しい声の奥さんじゃ、探しようがないね、あんた夢でも見たんとちがうのか」

質ねられた人は、嘲笑った。実際に彼女についての記憶は、まだ一年も経過していなかったにもかかわらず夢のように烟っていた。本当にあったことかどうかも定かではない。

それは年月が経過するほどにますます杳々と烟ってきた。記憶の中で恩人の女性のおもかげが美化されて固定した。特徴はなにか一つ具体的に捉えられていないが、彼女が千野にとって異性の偶像となったのである。

会いたい。会ってあのときの礼を言いたい。このまま礼を述べずに一生すごすのは、彼女に対して債務を背負

いつづけることである。

だが彼女に会いたい心の本音は、債務の返済にはなく、青春の幻影を確かめるところにあった。千野はいま幻影に恋していた。おそらくいま会えば幻滅以外のなものもあたえられないだろう。幻影は見届けないからこそ、幻影の美しさを維持しているのだ。

それはよくわかっていた。わかっているながら幻影の行方を突き止めたい。突き止めないことには心の整理がつかず、具体的な恋愛ができないのである。

千野が二十八歳の今日まで何人かの女友達とつき合ったことはあるが、独身を保っているのは、あの恩人の優しい偶像が心の祭壇に栖みついてからであった。

2

ともあれこのような体験があるので千野には見知らぬ人の難儀を見すごすことができない。重い荷物をもって

喘いでいる人を見かけると、駆け寄って助けてやる。身障者は進んで扶助する。老人や子連れの女性には席を譲る。女性が痴漢にからまれているのを見たりすると、敢然と阻む。

だが、彼の親切がすんなりと受け入れられない場合も少なくない。荷物をもってやると持ち逃げされるのではないかと警戒される。老人にうっかり席を譲ると、わしはそんなに年を取っていないと憤然とされる。特に若い女性に対する親切は注意を要する。なにか卑しい下心があるのではないかと痛くもない腹を探られる。一度迷子を警察へ連れて行くこうとして誘拐犯とまちがえられかけたことがあった。

現代の物質文明の爛熟は、人間を即物的にし、人間を相互不信に陥れた。例えば親は子供に見知らぬ人に声をかけられたらまず警戒しろと教える。子供の白紙の心に人間不信を教え込むのは、暗く重い。だがそれが子供にとって最大の自衛策となるならば、親は教えざるを得

ない。

千野は、現代が他人の難儀を救うことも難しい時代であることを悟った。だが難しかろうとなかろうと、他人を救おうとする姿勢を失ってはならないとおもった。そういう人間の姿勢の積み重なりが、物質万能のいまの時代における唯一の救いとなり、物質の洪水を支える防波堤となるのである。

千野が西尾林平と出会ったのも、その姿勢の産物であった。

三月末のある日の夕方、千野は勤めを終えて駅から自宅への道を歩いていた。駅前に自転車をおいて通勤している人も多い。自転車が徒歩の人たちを追い抜いていく。街が最も活気を取り戻す時間帯である。

千野が家の近くまで来たとき、なにかが衝突した気配があつて、気をつけろという罵声が飛んだ。千野がその方角を見ると、四つ角で自転車と老人が倒れている。出会いがしらに自転車と徒歩の老人が衝突したらしい。老

